

題材法話

前号からのつづき

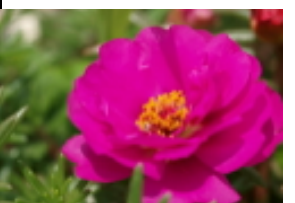
お説教の中に音楽性や面白話を取り入れたという「唱導」。この「唱導」が落語など日本の話芸のルーツなのですが、その笑いもツナには僧侶や門信徒も登場しました。ここが仏教のすごいところですよ。

○お笑いを一席

あるところに日蓮宗と浄土宗のお寺がありまして、その住職同士の仲が良くありませんでした。お寺で飼っている犬は、お寺で飼っている犬に「法然」というライバル寺の宗祖の名前を付けて「法然」の名前を付けて喜んでいました。

一方、浄土宗の住職の方も、同じように寺で飼っている犬に「日蓮」という名前を付けて、「日蓮」の名前を付けて喜んでいました。

互に歩の途で、犬を連れ



てばったりと出くわしたのです。

同士が仲が悪いということが自然と分かるのでしようか、犬同士でケンカつを始めたのです。最初はたいしたケンカで、だんだんと激しくなってきた、飼い主の激しくなってきた、奮し始めます。

宗の住職の方は「頑張れ法然！」「頑張れ法然！」と叫び出した。日蓮も「頑張れ法然！」「頑張れ法然！」と叫び出した。互いの宗祖の名前を呼び合っている。応援し始めたというので、達は大笑いしたという話です。

現在でもこの落語は残っている。もともとはこの説教の合間にす

な話をお寺の



ことなのです。

神教と呼ばれるキリスト教やイスラム教の世界であれ、教祖や信者をダシにしようものなら、戦争にまで発展しかねません。

○仏教の寛容性

とて、僧侶や信者を笑いの種にや、僧侶や信者を笑いの種にさえるのです。そして大笑いした後で、またしつかりご法義の話を聞いて「南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏」と悦ぶことができるのです。

この仏教の寛容性、寛大さは、やはり縁起の思想から来るのだと思います。私達は、みんながそれぞれに繋がって生きていて、互いに生かされ生きているという存在。これが仏教の根本的な考えです。

悪口を言い合っ



ていても、最終的にはどこかで許し合える世界があり

笑い合える可能性を持つているということなのです。ここに仏教の有り難さがあり、その教えに培われた日本人の心というのは豊かなはずなのです。

○梅鶯仏社の活動

このところが残念ながら、人の豊かさが大きく崩れてきていると云われます。『おかげさま』とか『ありがとう』とかいった文化が薄れてきていると云われます。

作家の藤本義一さんが、かつて犯罪を犯した少年達の追跡調査をしたところ、大きな罪を犯した少年達のほとんどが家庭にはお仏壇がなかったと書かれています。

梅鶯仏社の活動が、一人でも多くの念仏の仲間を増やすことに繋がればと思う事です。来年度も宜しくお願い申し上げます。

平成30年度